

氏名	たてべ しゅんすけ 建部 俊介
学位の種類	博士 (医学)
学位授与年月日	平成 24 年 3 月 27 日
学位授与の条件	学位規則第 4 条第 1 項
研究科専攻	東北大学大学院医学系研究科 (博士課程) 医科学専攻
学位論文題目	左心系心疾患を有する患者に合併する反応性後毛細血管性肺高血圧症の臨床的重要性に関する研究
論文審査委員	主査 教授 下川 宏明 教授 阿部 高明 教授 伊藤 貞嘉

論文内容要旨

【背景】

左心系心疾患において、後毛細血管性肺高血圧症の合併はその予後不良因子である。発症機序としては、左心系心疾患により上昇した左室拡張末期圧あるいは左房圧が肺動脈へ受動的伝搬する受動性後毛細血管性肺高血圧症と、更に肺動脈の収縮が加わった反応性後毛細血管性肺高血圧症の 2 種に分類される。しかし、後毛細血管性肺高血圧症の 2 つのタイプにおける臨床的重要性は不明である。

【目的】

左心系心疾患を有する安定慢性心不全患者に合併する後毛細血管性肺高血圧症、特に受動性と反応性後毛細血管性肺高血圧症の臨床的差異および生命予後に与える影響を検討した。

【方法】

2000～2010 年、東北大学病院循環器内科で右心カテーテルにて血行動態評価を行った 1685 例の内、左心系心疾患を有し NYHA2 度以上である安定慢性心不全患者 676 例を解析対象とし、カテーテル記録及び診療録から 臨床的特徴、血行動態、生命予後について比較検討した。

【結果】

676 例の内、158 例に後毛細血管性肺高血圧症 (平均肺動脈圧 ≥ 25 mmHg かつ平均肺動脈楔入圧 > 15 mmHg) を認め、58 例が反応性後毛細血管性肺高血圧症 (肺血管抵抗 > 2.5 Wood 単位)、残り 100 名が受動性後毛細血管性肺高血圧症 (肺血管抵抗 ≤ 2.5 Wood 単位) であった。単変量ロジスティック回帰では、4 つの因子が反応性後毛細血管性肺高血圧症と関連したが、多変量解析では女性 (オッズ比 2.12, 95%信頼区間 1.05-4.30, $P=0.03$) が唯一の独立した規定因子であった。平均 2.6 年のフォローアップ期間中、125 例 (18%) が死亡し、その内訳は、22 例が反応性後毛細血管性肺高血圧症、

24 例が受動性後毛細血管性肺高血圧症であった。多変量 COX 比例ハザードモデルでは肺血管抵抗の上昇が死亡の独立した予後規定因子であった(ハザード比 1.18, 95%信頼区間 1.03-1.35, P=0.02)。Kaplan-Meier 解析では反応性後毛細血管性肺高血圧症患者は、受動性後毛細血管性肺高血圧症患者あるいは後毛細血管性肺高血圧症の合併がない患者と比較して、有意に予後不良であった。また反応性後毛細血管性肺高血圧症の存在は、虚血性心疾患の有無や左室駆出率によらず、有意な予後不良因子であった。

【結論】

これらの結果から、反応性後毛細血管性肺高血圧症は女性に多く、左心系心疾患による肺高血圧症の重要な独立した予後予測因子であることが示された。従って、反応性後毛細血管性肺高血圧症は左心系心疾患による肺高血圧症の重要な治療標的になりうることを示唆された。

